

# 畠山義成洋行日記

（杉浦弘蔵西洋遊学日誌）

西村正守

元治二年乙丑正月廿日

晴天

一 六ツ半時分刑部殿御答〔そと〕ひ被成候処直ニ立出同道ニテ〇  
〇前へ横井町江着候〇〇本田弥右衛門殿ニモ同所〇〇暫時  
咄共有之楠公社江我々共一行参詣夫より伊集院町江暫時休  
息いたし候

妙園寺江参詣武運を祈誓奉り苗代川江七ツ後ニ着致候

正月廿一日 晴天

一 苗代川ヨリ五ツ時分ニ皆々同道ニテ出立市来港ニテ昼  
飯共仕舞夫より船に乗り羽島江安着いたし候

三月廿一日まで羽島浦滞在ニテ候

注 この一行分は日記の原文でなく、正月廿二日より三月廿一日迄の分も同じく日を追うて記されていたが、そのほとんどが蠹蝕により判読不能ため、土岐本（あとがき参照）の転写者がかく省略したものである。島津家本（あとがき参照）に比較的多く記述が残されている三月十九、廿、廿一日分を補記すれば次の通りである。

〔三月十九日

明廿日廻船之賦ニテ仕舞共致し居候所今晩五ツ過にも成ぬ  
らんとおもふ頃無端も羽島浦江蒸気船入津是そ此節乗船〇  
英船ニは別条有間敷と思ふ処御国之雲行丸之由相しれ無程  
川内松木堀〇〇上陸被致石垣氏〇何角御用談〇〇承り  
候左候テ蒸気船〇〇一日ニハ無相違廻船之由相分り候

三月廿日 晴天

明廿一日廻船之賦ニテ一同仕舞ニテ候



(島山義成)

三月廿一日 半天小風雨  
 ○○後ヨリ待居候得共八ツ半時分ニモ成りぬらんニ蒸気船  
 羽島江渡り来早速石垣氏○○○松木堀杯も乗込暫有て学頭  
 はしめ我々共ニ○○乗付○○○荷積杯も相濟候へとも今  
 晩丈ハ羽島浦江滯船之筋ニ相成候諸事船中ニテ之規則ニ基  
 キ四ツ時分○休息致候

三月廿二日 晴

一 早朝羽島の浦出帆昼前ニモ成りぬらん諸所島ハ雲内ニ

隠れ侍りぬ

同廿三日 晴

一 海上平穩ニテ一行八ツ後髪を切り西洋髪ニ相成候

同廿四日 雨西風吹候

一 ○○船もゆれ夫故気分悪敷皆酔方も有之候

同廿五日 晴天東風

一 ○○帆を揚げ沓時ニ拾○里位走り候

同廿六日 八ツ時分より小雨

一 蒸気ハ勿論順風ニ帆を揚げ余程船も早く八ツ後ニハ香  
 港ニ着船之賦候処入江後○○○より乗違ひ又々四五里位も引  
 返し戌之刻計リニ香港江着船無程軍艦ニ樂器を唱らし一入  
 よろしく聞へ侍へりける

三月廿七日 夕方より雨

一 早朝目覚四方を見廻し候処商買船も数す多く軍艦も大  
 小拾艘位入津買船之八九○○位入津「ホーム」は朝より上  
 陸いたし候異服求メノ周旋ニテ各々適宜ニ今服を相求めて  
 最早随分気分も直り通弁書読方共有之候

同廿八日 夕前より雨

一 今日ハ日曜日尤異服も不相調上陸不相成候

同廿九日 雨

一 今日も異服不相調故上陸不叶候

四月朔日 半天

一 今日ハ帽子服靴まで各相調八ツ後ヨリ上陸諸所見物い

たし酉の刻ハカリニ一行本船ニ帰り候

同二日 曇

一 九ツ時分ニ一行上陸諸所徘徊いたし八ツ時分ニ船江帰り候暫有テ「ホーム」朋友之蒸氣船参リ一行乗込ミ港口三四里計リノ所船修甫場ニ差越し機械見物いたし以前之蒸氣船ニテ暮時分ニ帰船いたし候

同三日 晴天

一 今日ハ上陸も不致諸事平日通り

同四日 晴天

一 昼後より上陸諸所見物ニテ候

四月五日 雨

一 今回ハ五ツ半時分ニ先日ノ蒸氣船来無程乗込荷積ミいたし夫より暫有テ○○○時飛脚船江乗込候船も随分大ク○拾四五間位と相見得部屋数も三拾位ハ有之候余は橋三笠同部屋ニテ候七ツ時分ニ香港出帆暮前より風起リ船酔致候船客も同様ニ候

同六日 晴

一 尅時ニ拾里位走る

同七日 快晴

一 一日之内食事三度宛ニテ候

同八日 快晴

一 諸事平日通り

同九日 雨天

一 四方島も不見矢張西と南の間を差て行けり

同十日 晴天

一 昼過より諸所島等も相見得尅時ニ十六里位行く様有之候

同十一日 快晴

一 朝五ツ時分新加坡之石炭所江着船致候旅人共思ひ〳〵ニ上陸致候我々も八ツ時分一行上陸車ニ乗り新加坡江差越諸所見物無程帰り候甚炎天ニテ難忍有之候今日は石炭を終日積方いたし船中も混雜ニテ候五ツ時分より又々車ニ乗り永井氏杯同車ニテシンカポール江差越候処広キ浜辺ニテ音楽杯も有之候無程帰り候道程尅里半余も有之候

同十二日 晴天

一 昨日上陸致候旅人共昼時分ニハ都テ帰船致候本島ヨリ船客四十人位乗込ミ候七ツ時ニ当港出帆いたし候此辺ハ余程影色宜敷候

同十三日 晴天

一 今日までハ諸所島も相見得候

同十四日 快晴九ツ半時分より俄ニ雨

一 朝五ツ時ピナン江着船毎之通食事仕舞無程上野氏はしめ四五輩同道ニテ上陸諸所徘徊致候処炎熱甚敷堪兼車ニ乗り滝之落る処有之由ニテ水掛リニ差越賦ニテ尅里半余も到り最早滝之近辺迄往着候テモ何分ニモ八ツ時ニハ出帆之管ニテ遅引を恐れ各其儘引返し九ツ過船江帰り着候当湊ハ余

〔衰へたる〕  
程表へ〇〇と見得候香港杯とハ同日之論ニナラス八ツ時分  
出帆ニテ候影色も勝れ候

同十五日 晴天沖西

一 西を差て行候頓と順風無之逆風ニ船余程動揺し段々船  
酔之人も〇〇〇〇(虫付ニテ不明ナリ)

同十六日 快晴 右同断

同十七日 快晴

一 始終逆風ニテ耆時ニ〇〇里位行〇〇〇〇動揺ニテ退屈  
致候

同十八日 雨

一 今日ハ雨天ニモ有之〇〇〇事〇〇船も動揺ニテ甚タ退  
屈致候

四月十九日 雨 右同断

同廿日 快晴

一 今日も不相替矢張逆風ニテ耆時ニ五六里位ニテ頓と船  
進兼候初メノ賦ニテハ十九日方ニ「ゴウル江着船之管ニ候  
得共順風無之故今日までも着船不相成候

同廿一日 四ツ過迄雨後晴

一 今朝五ツ前ニ「ゴウル江着船致候四ツ時分より各々上  
陸有之九ツ過ニハ快晴相成候まゝ我々も上陸諸所徘徊台場  
とも見物致候当地ハ英領ニ相成台場等も英国より都テ固メ  
候矢張当所も天竺之内「セイロン」と云フ所ニテ新加坡杯  
と〇敷甚色黒きものとも計リニて中々愚国と相見へ候拾人

計リ同道ニテ旅屋ニ立寄り食事杯いたし夫より此逍遙いた  
し日入前ニ帰船致候

同廿二日 雨晴

一 今日ハ終日上陸不致候

同廿三日 雨晴

一 今日ハ一同上陸宿屋江立寄り無程夫より車ニ乗り花園  
江為鬱散差越し見物いたし同所七ツ半迄ニ〇〇宿屋江暮時  
分ニ帰着候花園まで道程式里位有之候少時休息いたし隣家  
旅込ニ立寄食事仕舞五ツ過ニ帰船致候「シンカポール」ピ  
ナンハ殊之外炎天ニテ候へ共当所は〇〇涼敷有之候初メノ  
賦ニテハ当港ヨリ外之飛脚船にて「アデン」江着之管ニ候  
如多人數之事故乗移旁差支之訳も有之矢張今迄の船より孟  
買江乗往ク賦ニテやまり候当所は宿の〇〇〇〇余程沢山ニテ  
朝夕之食事〇〇〇〇尤田地等も有之候

同廿四日 晴天

一 朝五ツ時ゴウル出帆北ヨリ少シ西を行き候今日ハ余程  
逆風ニテ耆時ニ拾里位行き候

同廿五日 晴

一 今日ハ平穩ニテ耆時ニ拾里位行候

同廿六日 快晴

一 北少々西の方を差して走り候余は右同断

同廿七日 晴天

一 右同断夕方より遙ニ島なども見へ候



狼火を揚大炮を一発打相図を成し候無程港船數十艘こき来り終夜石炭積ミ致候

同八日 快晴

一 昨日之賦ニテハ今朝早天ニ当港出帆之管ニ「候」処今晝（日）プールより飛脚船着いたせしゆへ暮六ツ時迄出帆ノ管ニ替り候夜明ると直様陸地を望み候処不毛之地にて草木一ツも不相見候甚炎熱ニ〇〇〇兩三度位も雨降にて〇〇〇全駄人家モ少ク英鎮〇〇〇年代リニ来り候由尤英之台場四五ヶ所相見へ候人家も役目之住居と相見へ〇〇四五ヶ所所有之候駱馬ニ車を引せ或ハ乗杯いたし数十疋相見へ候通融之船何も外ニハ用事無之石炭積計リニ入港「いたし候」よし水も取候事ハ不出来候夫故〇〇〇艘も不相見へ候蒸氣船計リ七艘も出入致候山形ハ随分赤はげにて気色（不暇か）宜敷之極悪地と相見へ候

同九日 快晴

一 向風ニテ候得共風少き余り障る事無之晝時十一里位走り候時々赤禿岡相見へ候右之方ハアラビヤノ地左之方ハアフリカ州間々カクメ之類之鳥洋中ニ数十疋飛ビ候

同十日 快晴

一 右同断逆風ニテ今日ハ晝時ニ九里位ニテ候

同十一日 快晴

一 今日も逆風強き故晝時ニ八里位走り赤禿之岡草木一本も無之不毛之地左右ニ相見へ候

同十二日 快晴

一 右同断

同十三日 快晴

一 今日ハ少シハ風スクナキ故昼比より晝時ニ九里位走り西北四分ノ一北之方を差して走り候

五月十四日 快晴

一 北ヨリ少シ西之方を差して逆風故晝時ニ七里位走り候左右六里計リ之処ニ惣テ不毛之地相見へ候

同十五日 晴天

一 今朝六ツ半時ニ「シユニス江着船いたし候四ツ時過より当湊之小キ蒸氣船江一行乗り移り上陸いたし候本船より飛脚屋までハ〇〇〇ノ五里位有之候無程飛脚屋江立入り「ホーム蒸氣車之都合共團合候昨日飛脚船入港ニ付大方蒸氣車アレキサデルヤノ方江差越候まゝ今晚十一時ニハ爰許江又々引返し候由ニテ飛脚屋ニテ兩度食事共仕廻随分外ニ食事人数も諸方ノ打寄沢山にて候当湊ハ全駄浅瀬ニテ砂を決る機械船保有之余程能窮理之者と相見へ候段々船も大小數十艘相見へ間ニは我國之船ニ似たる船も有之候屋後より拾町位も有之候半敷洗濯場所并ニ氷作所江ホーム案内にて六七輩同道ニテ差越候炎天ニ氷ハ何ヨリ宜敷不思議なる事ニハ矢張潮を水ニなし其水を氷ニ作り矢張冬之氷ニテ少しも替ル事ハ無之候夫より仏蘭西之切通しニ見物ニ差越候当分深サハ晝丈〇尺と聞及候横幅八九間も相見へ候暫有

て八ッ過ニモ成りぬらんと思ふ比ニは帰着候当地は「トル  
コ」ノ内「アイゼド」云ふ地にて当国之大身「パシヤ」と  
云ふ領分と聞得候当地は随分涼敷有之夜四ツ半時ニ蒸氣車  
帰り来り候ニ付早速飛脚屋ニ残人数は都テ乗込ミ九ツ前ニ  
は蒸氣車を出し拾五夜之事ニテ勝れて月ハ潔かに影之間ニ  
〳〵砂漠相見へ居眠して沓時ニ十七里位走候程ニ十六日之  
早朝六時ニ「カイロ」と云ふ所ニ着候無程車より下り茶屋  
江立寄り茶を飲ミ直チニ又々本之車ニ乗り込ミ無程五ツ時  
分ニハ車を出し候  
同十六日 晴天

一 氣車ノ進行速カニして沓時ニ十七里位を走候故途上或  
千年以前ノ陵<sup>△</sup>岡<sup>△</sup>杯もありて委敷は見物いたし兼候夫よ  
り「沓時ニ拾七里位走る程ニ五ツ半前にもなりぬらむとお  
もふ比をひ」旅込屋江立寄四五十人も食事相仕舞無程相濟  
車を出し左右手広き平地之畠ニテ間ニ〳〵水牛駱駝驢馬或  
羊類之群れ相見得候十時過ニ「アレキサン德里」ニ着暫有  
て小蒸氣船江乗移り夫より英之飛脚船「グリー」と云ふ船  
ニ乗り候処此船は昨年成就ニ相成候船にて誠ニ部屋杯其外  
惣テ美を尽し実ニ極を窮め候船客も余り多く無之僅四五十  
人位にて万端船中ノ接対も宜敷是迄ノ船よりも規則正敷候  
余ニハ是前通矢張橋三笠氏と同居屋ニテ候部屋敷モ五六十  
迄ハ有之歟と相見へ候  
昼四時当湊出帆西北を差して走り候平日通り十時ニハ休息

致候

同十七日 快晴

一 西北之間を差して沓時ニ十里ナラシニハ走り候今日は  
余程涼敷候

同十八日 快晴

一 今日ハ少し横風ニテ帆開きニ為杯沓時ニ拾壹里ならし  
ニハ走り候

同十九日 快晴

一 右同断昼四時過ニ「モルタ江着船いたし候処無程八九  
輩同道ニテ上陸いたすと直ニ車ニ乗り「キリ〇〇寺江到り  
段々古物見物極古き繪杯沢山有之候寺も随分広大ニ候見物  
相濟と直ニ夫より四五町も有之武器之有る所と云ふ事ニテ  
差越候処鉄之鎧武者段々飾立其外劍或ハ小銃百目二三百目  
位之鉄炮又ハ七百年以前之文字と云て古物杯有之候当地余  
程要害之地ニ相見へ兵卒今日も手広き場所ニ押出調練いた  
し居候人口三十万位香湊ヨリモ繁榮ニ有之候暮時分ニ本船  
江帰り夜十時ニ出帆いたし候北を差テ走り候

同二十日 快晴

一 西北ヲ差シテ沓時ニ拾壹里ならし位ハ走り候諸所島杯  
相見へ間ニ船杯も相見へ候

同二十一日 快晴

一 右同断

同二十二日 快晴 右同断

同二十三日 半天

一 右同断昼二時過ニ「スユエス」江着船当港も英領ニテ台場等も相見へ随分繁花ニ見受候船數十艘入津致候我耆時計り滞舶故上陸不相叶候四時ニは出帆致候出帆前ニ暫時雨降候

同二十四日 快晴

一 耆時二十一里ならし位走り候

同二十五日 快晴

一 今日も耆時二十里位走り候逆風ニテ諸所船杯相見へ候右之方ニ時々島見へ侍りぬ「ホルトカルノ都五六里沖ニテ遙ニ見へ侍りぬ

同二十六日 快晴

一 右同断帆前船杯諸所漂居候

同二十七日 快晴

一 右同断四時過ヨリ英之地方見へ侍りぬ

〔我元治二年乙丑五月〕廿八日 快晴

朝六時過ニ「ソーサンプトン」江着船当湊へ繁栄ニテ船数モ多ク相見へ候無程ホーム上陸蒸気車都合共聞合タルニ五時ニ出車ノ由ニテ十時一同上陸ホテル江入り暫時休息無程二三町モ有之処ニ差越シ髪摘トモ致候当所ニテ諸人荷物不殘惣テ委敷改候由当地も大方四階五階ノ家作ニテ一駄賑々敷有之候三時ニ食事仕舞相済ト最早五時ニモ成リヌレハ直チニ蒸気車帰り来り各々車ニ乗込ミ五時半ニハ出車セリ耆時

ニ三十里ナラシニ走ル程ニ途中ノ影色宜敷所モ間々相見へ候得トモ委敷見ル事「モ」出来ズ山ヲ切通シ候所余多有之時トシテハ〇〇ヲ通り四方惣テ平地風影宜敷候八時ニ「龍動

府江着車致シ候処ガラバ兄ホーム朋友ジーム迎来り居何角ノ都合致シ候是レハ今朝「ソーサンプトン」よりホーム「テイガラフ」ヲ以テジームニ通シ候由尤もジームハ四五日前ヨリ此節ノ一件ニ付態々当地へ来り待居夫より馬車ノ都合共用意有之候ニ付早速一車ニ都テ乗込ミ「ジーム迄廿一人乗合ヒ「ソーチソーケンクトンクインホテル江九時過ニ首尾能万端至極ノ都合ニテ安着致シ候当地ハ日長キ故丁度暮過ニテ候諸事立派ニテ候暫時アツテ食事仕舞十二時比ニハ休息致候

〔乙丑五月〕廿九日 快晴

早朝「より」ジームホーム兩人一向差しハマリ此方ノ修業一件不一方世話致シ諸所聞合出候学校一条旁聞繕候処本ヨリ英之規則ニテ一ケ年内ニ二ケ月ツム休日有之候由ニテ当分ハ其休日ニテ放學致シ且ツ一同ノ処モ通弁出来兼候テハ早速入塾シテモ如何ト旁右ノ訳モ有之候ニ付二三ヶ月ノ間宿ヲ借請先生ヲ頼込混て当分ハ言葉ノ稽古致候へハ余程可宜敷ト一同之吟味モ定リ候右ノ訳故へ今日昼二時借切之宿江ホームジーム杯モ惣テ馬車ニテ差越候各々部屋杯定マリ衣服ノ手当モ追々都合致候由ホーム杯吟味ニテ尤モ火用心其外食事等ノ規則モホーム趣意丈ケハ委敷相述へ二時半位

ノ間緩々ト致シ暮時分ニハ石垣氏川内堀氏同敷相帰候右ノ  
三人并ジームホームハ矢張本ノ宿屋ニテ候其後上野氏ヨリ  
借宅ノ規則ホームより申出候趣意ヲ一行江伝達ニ相成候規  
則通り十二時比ニハ休息致シ候

乙丑閏五月朔日 快晴

今朝九時前ニシーム来リ何角之都合致候食後ヨリ〔一同〕  
読書三時比ヨリ衣服仕立物三人来リ銘々衣服ノ尺委敷取方  
致シ尤モジームもホームも一所ニ来リ一同尺取相濟之上ジ  
ーム杯ハ帰り候未タ各々衣服不相調故へ終日外出モ不相叶  
通弁ノ稽古ノミニテ候

閏五月二日 快晴

七時前ニ一同起九時ニ食事仕舞夫より通弁読書然ル処ニ五  
時ジームホーム先日より頼候先生「バーフ〔フレグレック〕  
と云フモノヲ同道ニテ列れ来リ彼是之事モ大畧ハ咄共有之  
明日方より此方江混て居付之賦ニテ暮前三人共ニ帰り候

〔閏五月〕三日 晴

今日ハ日曜日ニテ会説モ無之思ひノ説方ニテ候昼食前  
ヨリバーフ入来致シ色々咄ニテ日入前ヨリホームシームも  
来リ外ニ菅人同列ニテ来リ候昨日ハホーム長州人ニ途中ニ  
テ鳥渡遇ヒ候由今日此方ニ来候の時モ又々遇ヒ委敷事も不  
相分候得共三人一昨年ヨリ当地江来リ分理学稽古致候哉ニ  
ホームより聞及候

閏五月四日 快晴

今日は早朝ヨリバーフも十時比ヨリ一行読書ハ勿論字書杯  
稽古ニテ候バーフも今日より混て止宿ニテ一向言葉ヲ教へ  
候

〔閏五月〕五日 快晴

終日読書ニテ候七時過より石垣氏堀氏并ニシームホームも  
来リ候

〔閏五月〕六日 晴後曇

終日通弁書読ム

〔閏五月〕七日 朝より曇昼後より雨

右同断言葉之稽古ニテ候

〔閏五月〕八日 小雨

右同断通弁六時過より石垣氏川内堀氏入来被致候

〔閏五月〕九日 晴

通弁之稽古

〔閏五月〕十日 晴

今日ハ日曜日ニテ十一時比より石垣氏宿江差越候暫有テ帰  
リ候長州人先日より一行江面会致度旨ホームを以て申入候  
ニ付今日ハ六時後より三人被参首尾委敷聞候処江戸江初メ  
テ出て一昨年五月十日攘夷期限之御前々日五月八日夜中横  
浜ヲ忍出懸意之西洋人江便り異船江被乗込四ヵ月目ニ当地  
江着被致候由其節は五人ニテ候得共兩人ハ昨年帰国被致候  
由聞及候其外彼是之咄共有之十一時比ニ被帰候

〔閏五月〕十一日 晴

今日は昨日之約束ニテ尅時ニ山尾氏被来諸生走り競或ハ飛  
競杯之遊方見物ニ列れ被往候六時ニ帰着候

〔閏五月〕 十二日 晴雨

終日読書ニテ候暮八時比三人之衆被来候

〔閏五月〕 十三日 晴

終日読書手習ニテ候

〔閏五月〕 十四日 曇雨

右同断

〔閏五月〕 十五日 晴天

右同「ゲーム」バルリーも今日より来り書を讀せ候

〔閏五月〕 十六日 晴雨

日曜日ニテ毎之通り稽古も取止メ朝食後よりパーフ始メ五  
六輩同道ニテケンシンクトン花園江差越候諸所見物致居候  
処途中より雨降出し木蔭ニ暫時雨宿いたし晴上ると無程帰  
り候二時比よりケンシンクトンホテル江差越し五時前ニ帰  
り候

〔閏五月〕 十七日 快晴

終日読書字書ニテ候

〔閏五月〕 十八日 晴雨

右同断

〔閏五月〕 十九日 快晴後雨

右同断

〔閏五月〕 廿日 晴天

右同断七時後より逍遙致候

〔閏五月〕 廿一日 晴雨

右同断十一時比より「バルリー」二時比ヨリ「グレイン」先日  
ヨリ毎日教へ方入来致候

〔閏五月〕 廿二日 陰

右同断

〔閏五月〕 廿三日 陰

右同断

〔閏五月〕 廿四日 陰

日曜日ニテ三時比ヨリ逍遙致候

〔閏五月〕 廿五日 晴

終日毎之通り読書

〔閏五月〕 廿六日 陰

右同断

閏五月廿七日 晴

右同断

〔閏五月〕 廿八日 晴

右同断

〔閏五月〕 廿九日 雨陰

右同断

〔閏五月〕 晦日 雨陰

右同断

乙丑六月朔日 雨

日曜日ニテ朝食後よりケンシングトンホテル江四五輩同道  
ニテ差越一前ニ帰り四時比より山尾氏之宿江差越暫時談  
話致候尤明日ハ造船場見物致度との事にて都合を山尾氏ニ  
頼賦ニテ候得共手形之都合早速ニハ調兼夫故延引いたし候  
六時過より山尾氏同道ニテ帰宿致候色々之話共有之十時ニ  
被帰候

六月二日 陰小雨

毎之通読書

〔六月〕三日 晴

一昨日山尾氏ニ約束いたし候今日は「コレレヂニ四五輩同  
列ニテ差越候処山尾氏未タ出席無之故暫時ケミスト所ニ待  
居候処十二時過ニ山尾〔氏〕出席被致無程同道ニテ武器蔵  
「リアウス」と云所江同道ニテ差越候処兵卒も段々相見得  
早速案内者出来り委敷案内ニテ全鉢当所ハ古來之王城ニテ  
最早八百年計以前ニ取立ノ由にて余程古く相見得当分武器  
格護所ニテ兵卒屯場ニ相成始終訓練等も致候由ニテ則チ今  
日も折角いたし居候劍銃格護ニ相成數六万五千挺其外馬乘  
人形鎧武者或ハ劍杯數ス知レス「支那「ホルトカル」トル  
コ」杯と戰爭之砌分捕ニ相成候大砲等も段々有之候偕又  
「帝王ノ冠リ深ク格護ニ相成金細工之器物も段々有之諸所  
委敷見物いたし候夫より暫時近辺之町家ニ立入り食を仕舞  
無程山尾氏之矢張案内にて船修繕場見物夫より川ノ下ニ道  
ヲ切通し候所〇〇と云ふ所通り候処中途ニハ段々見せ物杯

有之四町位も可有敷と見得侍りぬ帰りニハ蒸氣船にて川を  
乗上り橋之涯ニ船を着ケ山尾氏も同道ニテ帰宿致候山尾氏  
ハ「ケンシングトンホテル江用事有之由ニテ七時過ニハ彼  
方江又々被往候

六月四日 晴

毎之通り読書セリ

〔六月〕五日 快晴

右同七時過より歩行致候

〔六月〕六日 快晴

右同

〔六月〕七日 快晴

「ウルヤモソン」之案内ニテ今回ハ農業之器械製造場ニ見  
物トシテ差越賦ニテ「グレイム七時過より此方江来り八時  
ニ食事仕舞無程六七輩同道ニテ蒸氣車問屋ニ差越候処「ウ  
ルヤモソン」始メ山尾氏野村氏杯も出会テ丁度蒸氣車ニ乘  
込処ニ石垣氏ハンメ三人ノ衆被来一所ニ出車拾二時比ニ器  
械所ニ着候当所迄ハ五十里余有之候由夫より一同役所ニ差  
越各五六人ツム相分り案内を乞ヒ器械委敷見物致候夫より  
四五町も有之処〇〇被立寄候ニ付一所ニ集リ随分大キナル  
花園等も有之庭風ノ影宜敷場所ニテ候暫有テ食事仕舞無程  
帰掛ニ器械ヲ以テ畠ヲスク場所ヲ諸所見物ニテ又々馬車ニ  
乘り中途ニテ牛杯見物イタシ蒸氣車も九時半ニ出ル賦夫故  
諸所ニテ麦刈器械杯も見物ニテ又々以前食事致候宿ニ立寄

り出車之刻限ヲ見合九時過ニ蒸氣車間屋ニ差越居候処無程  
車も来り早速一同乗込ミ十一時半比ニ帰着候

〔六月〕八日 快晴

日曜日ニテ候得共昨日之他出ニ付今日ハ復読共致候

〔六月〕九日 晴

毎之通り「バルルイー」「グレイム」も来り読書致候グレイ  
ム義ハ当分休学ニ相成故明後十一日「スコットランドの方  
江二七日計リ之間帰国致由ニテ暇迄ともいたして帰り候

六月十日 陰雨

毎之通り読書「グレイム代リニ」「ラブラエンと云人今日よ  
り来り教へ候

六月十一日 雨

十一時より八人列れにて「ブアーフ案内としてホトガラヒ  
」取ニ差越候七時過ニ帰着候

〔六月〕十二日 陰

毎之通り読書

〔六月〕十三日 快晴

十一時比より近所之蒸氣車修補場ニ五六輩同道ニテ差越諸  
所見物いたし尅時前帰着候

〔六月〕十四日 快晴

毎之通り読書

〔六月〕十五日 快晴

日曜日ニテ朝食後より「ケンシントンホテル江松村永井

沢井浅倉同道ニテ差越候尅時ニ帰り候処関氏出水氏江用事  
ニテ被来居候

〔六月〕十六日 快晴

月曜日毎之通り読書

〔六月〕十七日 快晴

火曜日「コルンデー三時比より斤目習ニ上野氏松村松元岩  
屋同道ニテ差越候処「バルリー委敷教へ候六時ニ帰着候

〔六月〕十八日 快晴

水曜日毎之通り読書夕八時比ニ仏蘭西之「ロニー」と云人  
并ニ才藤健次郎と云人兩人同道ニテ入来被致候此齋藤氏ハ  
本と熊谷之藩ニテ故へ有て懇意之仏人ニ万事頼込ミ四年前  
ニ横浜より乗船ニ相成候由「ロニー」ハ全躰ニ我国之学文  
ヲ好ム人物にて大略日本語も通し十時比「ケンシングトン  
ホテルの方江兩人共ニ被往候

〔六月〕十九日 雨

木曜日平日通読書石垣氏関氏高木氏英国中諸器械等為見物  
当地今日出立有之候

六月廿日 快晴

金曜日毎之通読書一時前ヨリ「ホーム才藤氏并ニロニー此  
三人「入来」ニテホームハ明日家ニ帰り候由ニテ暇乞トシ  
テ今日ハ見舞ニテ候兩人ハ十時過ニ被帰候

〔六月〕廿一日 陰雨

土曜日諸事平日通十時比より才藤氏入来被致暫有テ「ロニ

も入来ニテ緩々と咄共有之夜十時比ニ被帰候

〔六月〕廿二日 晴

日曜日昼時分ニ暫時逍遙致候才藤氏入来被致候

〔六月〕廿三日 晴

月曜日毎之通読書昼後より才藤氏入来被致候

〔六月〕廿四日 雨

火曜日右同断

〔六月〕廿五日 陰晴

水曜日右同断

〔六月〕廿六日 快晴

木曜日右同断

〔六月〕廿七日 快晴

金曜日右同断

〔六月〕廿八日 快晴

土曜日右同断才藤氏暫時入来被致候先日より追々兩人ツム

諸所江ウルヤモン之世話ニテ上野氏はしめ相分れ候我等

も近日外之宿江移賦ニテ候長沢事今日より「スコットラン

ド之方江差越候

六月廿九日 快晴

日曜日ニテ朝より才藤氏も被參二時過より五輩同道いたし

高見氏兩三日前より少々風邪ニ付為見舞差越し候暮過ニ帰

着候才藤氏ハ今晚ハ一宿被致候

七月朔日 快晴

月曜日平日之通り読書「グレイン先日よりコントロリーニ帰  
ラレ候如今日又々此方江来られ候

#### あとがき

明治八年、当館の前身「東京書籍館」が創始となるや、  
文部省中督学 畠山義成はその館長を兼ねた。畠山は、在職  
中の翌九年四月、文部大輔田中不二麿に随行、米國フィラ  
デルフィア博覧会へ派遣を命ぜられ渡米、同年一〇月二〇  
日帰途太平洋上に病死した。

故人の蔵書（洋書）九一九冊は、実兄鹿兒島県士族二階  
堂蒞から「貴館ニ納メ普ク稠人ノ縦覧該博ノ一助ニモ相成  
候ハハ本人遺念モ相達シ靈魂モ満足可致」として明治一〇  
年一月東京書籍館に寄贈された。一冊一冊に「故東京書籍  
館長畠山義成遺書」の朱印が押された蔵書のはとんどは、  
現在当館に襲蔵されている。

元治二年（一八六五年）、薩摩藩は五代友厚の建白に基  
き、英國へ留学生団の派遣を計画、長崎の英商トーマス・  
グラヴァーの周旋により実行となったが、畠山もその一員  
に選ばれ、幕府をはばかって杉浦弘藏と変名の上これに加  
わった。本日記はその際の洋行記録で元治二年正月廿日に

始まり慶応元年（途中改元による）七月一日で終つてゐる。

以後薩摩藩士杉浦弘蔵が、英米留学を経て文部省中督学  
畠山義成に至る迄の経緯については

公爵島津家編輯所編「薩藩海軍史」（同刊行会 昭和三年）

犬塚孝明「薩摩藩英国留学生」（中央公論社 昭和四九年）

林竹二「幕末の海外留学生」（「日本フォーラム」一〇巻 四・六・七号 昭和三九年）

等の労作に詳しいところである。

本日記は、未刊であるが、現在、原本ならびに二種の写本が確認されている。

原本は現在鹿児島尚古集成館に所蔵されている。但し「五月廿八日ヨリ」の後半部のみである。「西洋遊学日誌杉浦弘蔵」と題されている。縦二二・八糎×横一六糎、墨書であるが、蠹蝕甚だしい。

転写本は二種ある。

その一は、大正一二年に公爵島津家編輯所が写字生二名に命じて、筆写（墨書）させたもので、現在東大史料編纂所に収蔵されている、二冊ものである。

前半部の標題は「漂流日誌」となっており正月廿日から

閏五月二十日迄の内容である。

後半部の標題は「西洋遊学日誌」で五月廿八日より七月一日迄の分である。

すなわち五月二八、二九日、閏五月一日〜二〇日分計二日分が重複となっている。前半部には特に蠹蝕としての空白部分が多いので、原本のこの部分は破棄されたのではないかとも思われる。

転写本のその二は、大正五年六月二六日、土岐久賀氏から鹿児島県立図書館に寄贈されたもので、標題は「畠山義成洋行日記」となっており、巻頭には

畠山義成君初々洋行之時之記

平ノ馬場自宅ヨリ

との注記が附されている。全文ペン書きである。

転写本二種を比較するに、大正一二年と大正五年（又はそれ以前）の転写の時期の差（原本の蠹蝕度の差）からか、後者土岐本（鹿児島県立図書館所蔵本）の方が、内容豊富というか判読部分が多い。

従つてここでは土岐本を中心に醵刻し、土岐本の脱落、誤読と思われる部分を、島津家本（東大史料編纂所所蔵本）で補った。補完の分は「……………」を以て表示した。原本残存の後半部分については、原本（尚古集成館所蔵）に遡った。

本日記（土岐本）の主要部分は前出「薩摩藩英国留学

生」に引用、収録され、その背景も含めて詳しく注解されているので、ここでは日記の全文をそのまま掲載するにとどめた。同書を是非一読、参照願いたい。

土岐本の転写者は、土岐久賀氏かその周辺の人かと思われるが定かではない。土岐久賀氏は畠山義成の甥（土岐久賀の父土岐四郎は畠山義成の兄）とも伝えられるが確認迄には至らない。大方の御教示を待つ所である。

なお、畠山義成の官歴については、次の履歴書がある。

鹿児島県土族

従五位畠山源義成

天保十三年壬寅九月生

杉浦通称弘蔵

明治五年三月

於米国華盛頓

特命全権大使三等書記官被仰付候事

同六年十月十二日

補五等出仕

太政大臣従一位三条実美 宣

大内史正五位土方久元 奉

同年同月二十五日

補文部省五等出仕

右大臣正二位岩倉具視 宣

同日

大内史正五位土方久元 奉

兼補五等出仕

同上

同上

同年十二月十九日

開成学校校長兼外国語学校校長被仰付候事

同七年二月八日

宮内省御用掛兼勤被仰付候事

同年六月二十日

任文部少丞

太政大臣従一位三条実美 宣

大内史正五位土方久元 奉

同月二十二日

学務局長被仰付候事

東京開成学校校長兼勤被仰付候事

同年九月十五日

督学局長被仰付候事

東京開成学校校長兼勤従前ノ通候事

同年十一月五日

叙正六位

太政大臣従一位三条実美 宣

大内史正五位土方久元 奉

同月八日

任中督学

同上

同上

同八年二月二十三日

大使事務局書類取調御用掛被仰付候事

同年三月十五日

書籍博物両館長兼勤被仰付候事

東京開成学校校長兼勤可為是迄ノ通事

同年六月八日

任少督学

太政大臣從一位三条実美 宣

大内史正五位土方久元 奉

同年十月七日

任中督学

同上

同上

同年十一月十七日

叙從五位

同上

同上

同九年四月七日

文部大輔田中不二麿米國費拉特費府派遣ニ付隨行被仰

付候事

これは、畠山義成の在職中の死に際し、祭料下賜を願った左の文部省何文書（明治九年一月三十一日付）の添付履歴書である。

文部省何

故中督学從五位畠山義成右ハ明治五年三月於米國華盛頓特命全權大使三等書記官奉職以來拮据勉勵且ツ東京開成学校及ヒ東京書籍館東京博物館等ノ長ヲ兼ネ其功勞不少候処先般田中文部大輔米國派遣ニ付隨行イタシ其帰航中病死候ニ付特別ノ御評議ヲ以テ祭料トシテ金五百円被賜候様イタシ度依テ別紙履歴書相添此段上申候也十月三十一日

（太政類典二編三三二卷一七所収）

畠山義成洋行日記の本誌掲載は、当館の前身「東京書籍館」の館長畠山義成の人となりをあかず一助として、企画されたものであったが、鹿児島県立図書館、尚古集成館、鹿児島県維新史料編さん所下堂園純治氏、鹿児島短期大学伊藤松彦氏、大久保利謙氏等の御好意と御協力により、ここに実現をみた。深く感謝の意を表する次第である。

（にしむら・まさもり 司書監）